

よ あ まえ てんし

夜明け前の天使

この世の中で、本当に価値のあるものなんて、たかが知れている。

手に入れる前は、目の前のショーウィンドウに見栄えよくディスプレイされているうちは、例えどんなに明るく眩く光り輝いて見えたとしても、いざ手に入れてしまうと、何となくみすばらしく、滑稽で、酷く下らない物に見えてくるものだ。

子供時代にあれほど誇らしげに輝いて見えた玩具や、学生時代の小遣いではちょっと手に届きそうに無かったあの品々、それに、大人になってからでも何年間も生活費を切り詰めなくては買えない高価な品物や、一生に一度だけと覚悟を決めた大きな買い物……それらの全てが、手に入れた途端に何となく色褪せて見えた。

結局、この世の中に存在する物の大半はガラクタの様な物だらけで、それを如何にも素晴らしいかの様に装うのがほんのちょっとだけ上手く、そういった小細工に容易く欺かれる人が騙されやすいだけの事なのだろう。

そして、そういった物達は、あればあったで多少は便利だったり、多少は心が満たされた様に錯覚しても、別に無ければ無いでも何とかなってしまうもので、是が非でもそれが無いと困る……という必需品でもない。

人は、得てしてそういう下らない物に激しく情熱を注ぎ込み、多大な労力と時間を浪費しながら入手し、一度手に入れたそれらの物を決して手放そうとせず、更に多くの下らない物を手に入れては、自ら余計な負担を背負い込む性分を生まれながらに宿している。

僕が、そんな人としての人生に嫌気がさし、全ての物を手放してしまったのはつい最近のことだ。

始終周囲に気を使いながら、自分の時間と神経をすり減らして得た幾ばくかの金銭で、そういった下らない物達を手に入れ、失った時間やすり減らした神経の埋め合わせをしようとしている。

常に拭い去る事の出来ない異物感、疎外感を自分のうちに抱えながら、また、周囲からも明白に異質な者という扱いを受けながら、それでも肌合いの合わない周囲の流れに無理して合わせようとして、いつかその無理の行き過ぎが破綻へと繋がってしまう。

いつでもどこでも、その様な体験を何度も無く繰り返してきた。

「放っておいてくれれば良いのに。放置しておいてくれれば良いのに」

そう思った事も度々ある。

しかし、現代の世の中では、幾ら周囲の流れが自分と肌合いが合わなくて、その流れに乗りたくないと思う者がいても、個々人の意思に関わり無く全てを飲み込んでしまう、自由な選択肢に欠ける世の中なのかもしれない。

一見民主主義社会は、自由意志に基づいた様々な人生の選択肢を用意している理想的な

制度に見えるけれども、それは単なるまやかしかでしかないのかも知れない。

建前として、個々人の自由意志が全てを決定するとは言っても、実質的には多数決の原理がある以上、多数の定めた社会の仕組みに、その社会の全ての構成員が従う事を義務付けられる。

元々多数の側に与した者なら、その義務を負う意義に共感するかも知れないが、元々少数の側に与した者が、決まったからといって自らの自由意志を曲げられた結果だけを与えられ、義務だけを果たせというのは少々理不尽ではないかと思う。

せめてそういった人々には、多数が定めた社会の流れから外れる事の出来る程度の、自由意志が認められても良いのではないだろうか。

しかし、実際には、針の穴ほどの隙間も漏らさず、あらゆる場所に現代社会的な社会の仕組みの網が張り巡らされ、例えどこへ逃げようと、その仕組みに服従する事からは決して逃れられない。

だからといって、膨大な数の人々が担っているその流れを、たった一人で根本的に変えてしまうなど、例え無理ではないにしても不可能に近い。

それに、丸々一生分に値する時間と、その間に注ぎ込める全ての労力を費やしたとしても、余りにも見返りは少ない。

そうやって全てに絶望して、結局人は、本来ならまだ自分に残されているであろう時間を強引に断ち切ってでも、この生き辛い世界そのものから逃れようとしてしまうのだろう。

形ある物を全て擲って、周囲の異質な人々との関係を全て断ち切って、最後に自分の手元に残ったものは、全てを自分自身の中で育み、全てが自分自身の中で完結されるものだけだった。

僕は、物語を書き綴るのが好きだった。

この異質で生き辛い世の中であって、唯一僕の抑えつけられた心を自由に羽ばたかせて、伸び伸びと思い向くままに過ごせる時間は、自らの心の中で紡ぎ出した世界の中に身を置く事だった。

時にはその世界の支配者となって世界のあらゆる存在や理を創造し、時にはその世界の登場人物となって様々な不思議な体験を重ね、新たな歴史を刻んでゆく。

例えそれが誰にも認められなくても、それが下らない物と見られてしまっても、それはただ単に価値観が違うというだけの事でしかない。

僕にとってはそちらの世界の方が実体であり、こちらの世界は肉の体を維持する為だけのつまらない虚構に過ぎなかったのだから。

しかし、大半の人はこちらのつまらない世界にリアリティを感じているのだから、僕がこちらの世界に留まろうとする限りは、否応無く何らかの影響を受けてしまう。

いつしか、こちらの世界のつまらない俗物の塊を押し付けられて行くに従って、本来の自分が取り戻せる世界に身を置く機会が閉ざされてしまった。

それからしばらく時が流れて、ようやく本来自分が身を置くべき場所に戻ってきたのだ。
こちら側の、肉の体が属する虚構の世界から完全に隔絶する事によって。

*

そんな僕にも、こちら側の世界にあって唯一心満たされる事があった。
この世界と自分とは何かが根本的に違っていると自覚してから、この世界に存在する事自体に
異物感や疎外感を強め、耐えられなくありつつある時期に、ふと偶然目の前に現れた女性
がいた。

周りに多くの人がいて、一見周囲からは楽しく、和やかな日々が過ぎていると思われてい
ただろう、ちょうどその時、僕の心の中には、しばらくの間訪れていなかった『本来いる
べき世界』への強烈な郷愁と、周囲の人々とは決定的に分かり合えないと自覚したが故
の、強烈な孤独感に苛まれていた。

周囲のわかり合えない人から、ただその世界に居続ける為の義務のみを課されて、周囲に
人がいるだけに余計際立つ、全く共通点の見当たらない異物同士が、その場の雰囲気を乱
さぬ様に作り笑いを浮かべつつ、共に居続けなければならない精神的苦痛は、僕のような異質
の者でなくては理解出来ないと思う。

かつて、僕は自分の事を『生まれる時代と場所を間違えて生まれて来てしまった』と感じ
た事があった。

この国が延々と長年をかけて積み重ねてきた歴史は好きだったし、興味深かったし、
共感を持てた。

しかし、今の時代は、自分の周りにある全てのものが異物感、異質感に覆われ、何の価値も
ない、役立たずのガラクタの様に感じた。

むしろ嫌悪感さえ覚えた。

それは僕自身も周りに対して抱いていたし、周囲も僕自身に対して扱い辛さを感じてい
たと思う。

そんな時に、僕の凝り固まった心を癒し、それまでは誰もが避けて通った、僕の異質な
心の内に踏み込もうとした女性が現れた。

彼女は何の躊躇も無く、自然体のままで僕の心の内側に入り込もうとした。

これまでの人生の中で、こんなに迷い無くすんなりと僕の心の中に踏み込んでくる女性
は、いや、男性も含めて、僕の記憶の限りでは初めてだった。

僕は、彼女の反応に一瞬戸惑い、いぶかしみながらも彼女の様子を窺った。

これまでに散々この世界で異物感、疎外感に苛まれて来た僕には、『自分と僅かばかりで
も共感を得られる人がいる筈が無い』という諦めが強かったから、僕自身に興味を持って
近づいてくる女性がいる事を嬉しくも感じたが、反面どう対応するべきか扱いに困っても

いた。

彼女は僕の繊細で精巧な心の内に割り込んできたが、僕の事を理解してくれようと、努力を傾けてくれた。

僕もそれに応えようと、彼女の心の扉を開き、その中の素晴らしいものや醜いものまでを含めて理解し、受け止めようと努力した。

少しずつ、彼女の心の内が理解出来るようになってきた頃は、とても充実した日々だった。

これまで日々悩まされていた、言い知れぬ疎外感、異物感が、初めてこの世界にある者によって癒されたと感じた。

それは、かつて僕が自分の心の内に求めた『本来いるべき世界』とよく似た様な印象であって、より現実感がこもった感覚だった。

現実感がこもっている分だけ、力強く、より確実なものに感じた。

僕は、より深く彼女の事を理解したくて、最初に彼女が僕の心の内に入り込んだ様に、彼女の心の最も奥深くにまで入り込み、多分彼女が長年に渡ってそこに封じ込めていたであろう、パンドラの箱を開けてしまった。

多分、そのパンドラの箱に手をかけようとした時に、彼女から『それに触ってはダメ』というシグナルが送られたのだろうが、僕にはそれが分からなかったか、気がついていても無視していた。

なぜなら、そのパンドラの箱は彼女の心の中の醜い部分を食べて成長していたから、このまま封じ込めていても、いずれ箱を食い破って暴れ出すと感じたから。

そうなのは手遅れになるから、今のうちに開けてしまっ、その嫌なもの、醜いものを癒して消し去ってあげるべきだと、頑なに信じ込んでいた。

パンドラの箱から出てきた怪物は、彼女の心の中で暴れ回り、多分僕よりも更に繊細で脆く儂かっただろう、彼女の心をずたずたに引き裂き、食い破り、粉々に打ち砕いてしまった。

僕にはなす術が無かった。

例え意図的ではなかったとはいえ、彼女の心が壊れてしまう引き金を引いたのだから、途方も無い罪悪感の嵐に苛まれた。

それでも、きっと、彼女がその時に受けていた苦痛に比べれば、僕が感じたものなど風がそよぐ程度だったに違いない。

そして、彼女は心の中をずたずたに壊されたままの状態、僕の元を去った。

僕は後悔した。

僕があのパンドラの箱に手をかけなければ、彼女はあれほど苦しまずに済んだのかも知れない。

もしかしたら彼女はあのパンドラの箱をずっと封印し続けたまま、人生を全うしたかも知れないし、もう少しダメージが和らいでいたであろう、別のタイミングが合ったのかも知

れない。

もし、僕が、あの時彼女が僕の心 に 侵入 するのを拒んでいたら、彼女の心 に手をかけるような事態は起こらなかっただろう。

もし……。

その後、彼女がどうなったのか、僕は知らない。

僕の心の中に、この世界に存在する者によって、唯一、つかの間であっても心 が癒されたという淡い記憶と、取り返しのつかない過 ちを犯したという強い後悔の念だけが残った。

それ以降、僕は人との付き合いに更に臆 病になり、疎ましく感じる様になり、いつしか、世間から隔絶されている事に唯一の拠り 所 を求める様になっていた。

*

僕は、夢を見ていた。

余りにも非現実的で、曖昧としていて不透明だったから、夢だとしか判断のしようが無い。

僕が世間から隔絶されてからしばらく経ち、いよいよ永遠にこちら側の世界から旅立たなければならなくなる、ちょうど瀬戸際の頃、不意にその非現実的な夢が僕の前に 現れた。

もう、こちらの世界でやらなくてはならない事は、何もかもをする氣力を喪失して、寢床で静かに横になって『本来いるべき世界』にひたすら身を置いたまま、こちら側の世界からの永遠の旅立ちの時を待ち望んでいた深夜のひと時に、部屋の天井付近から浮き出るように、突如雪の様な光の粒が舞い始めた。

その粒は、始めは一粒、二粒と徐々に増えてゆき、やがて天井の一角を眩い光の集合で丸く形作るほどに増えていった。

その光の粒は本当に雪のようなもので、床に落ちる傍から無言の音を立てては弾けて消えてゆく。

あつ 熱くも無く、冷たくも無く、触った感 触も無く、何かの物質に触れると途端に弾けて消える謎の雪。

とても眩しいけれども、どこか 儚げで優しく、穏やかな光の玉。

僕は、自分の部屋に突如 現れた、『本来いるべき世界』の光景とも見間違える不思議な現象に目を奪われていた。

やがて、天井付近に集合する光の玉の中から、今度は細長い棒の様な形の光が降りてきて、ちょうど床から十センチくらいの所で静かに浮遊していた。

光の棒は見る間に人の影の形に変形し、やがて、僕の前にその姿を露わにした。

まだ、二十歳前くらいの女の子だろうか。

どこと無く古風で、清楚で、温かくて、それでいて凛とした芯の強さを持った、多分高貴な女性なのだろうと瞬間的に思った。

でも、辛うじて確認出来たのは彼女の顔だけで、後は光り輝く髪と、光り輝く衣装に包まれて、それ以外のものは何もわからなかった。

相変わらず降り注ぐ無数の光の雪に覆われた彼女は、労わる様な慈しみ深い視線で僕を見下ろして、言った。

「あなたは今、自らの運命を曲げて、この世界から永遠に旅立ってしまうか、ここで踏み止まって自らの運命に再び立ち向かうか、最後の選択を迫られる境界に足を踏み入れておられます」

思わず口を半開きにしながら、目の前に繰り広げられる幻想的な光景に魅入られる僕に対して、彼女はどことなく温かい、母親が幼子を見つめる様な眼で僕を見る。

そして、相変わらず彼女は床より若干宙に浮いたまま、膝を折って覗き込むようにして、床に伏せたままの僕に語りかけた。

「私は、あなたが再び自らの運命に立ち向かう事を願いますが、全てはあなたの判断に任せられます」

「あの、あなたは一体誰なのですか？」

「私が誰なのかという事などは、それ程重要ではありません。でも、もし気になるのであれば、『私はこれまであなたの事を見守ってきた』とだけ、言っておきます」

これは一体どういう事なのだろうか。

今現れたタイミングにしても、その言葉にしても、確かに僕の事を知っている様には思われた。

でも、だからといって、彼女が誰で、なぜ今ここに現れたのかという事は良く分からなかった。

こういう支離滅裂な一見ありえない状況は、大抵夢が作り出す儚い幻に決まっている……僕がそう思った矢先に、彼女は僕を教諭するように言葉を継いだ。

「私が今ここにいるのが夢か幻かという事は、それ程重要ではありません。あなたは実際に、現実の世界を虚構と感じて退け、自分の心の中の世界を『本来いるべき場所』として留まっていたのではないですか？」

確かにそうだ。

僕にとっては、自分の心の中の世界が唯一心安らげる場所だった。

でも、それと夢や幻とは違う。

自分の心の中の世界は、自分が思い描くように自由に作り上げる事が出来る。

しかし、僕は彼女を作り出して呼び寄せようとした訳ではないし、夢や幻は自分の思い通りにならない。

それでは、現実と呼ばれている、下らないガラクタばかりの虚構世界と同じ様なものだ。

彼女は尚も言葉を継ぐ。

まるで、僕の考えた事がそのまま伝わっているかのようだ。

「あなたの心の中の世界も、現実と呼ばれている世界も、あなたが夢と呼ぶ今この時も、実際に何が起きているという事以前に、あなたが何を感じ取ったかと言う事が重要です。どの様な物事が起きているかという事よりも、『あなたがどう思ったか』という事が、あなたの眼に映るこの世界の形を決めるのです」

全ては僕自身が決めたとも言えるのだろうか？

特に現実と呼ばれる世界について言えば、僕はむしろ常に決められ、規制される側だった。

僕が決めた事なんて一度もありません。

仮に何かを決めたとしても、予め定められたこの社会の仕組みの範囲内の選択しか許されず、常に想定された幾つかの選択肢のうち、いずれかを選ぶという程度のものでしかない。

そんなものが自分で選んだといえるのだろうか。

与えられた全ての選択肢に違和感を感じても、それ以外の選択は社会の仕組みそのものが許さない。

そんな息苦しい社会のどこに、僕が自分で決められる余地なんかがあるのだろうか。

そういう現代社会の犠牲者が僕自身なのに。

彼女はどこか寂しげで、でも仄かな温かさに満ちた表情で、ずっと僕を見下ろしている。

「あなたは、そうしていつも『現実と呼ばれる世界』の不条理と自らに襲い掛かる不幸を嘆いてばかりいますが、それでは、あの世界は今までもずっと息苦しく嫌な事ばかりが降りかかる世界だったのですか？ 心が満たされたり、良かったと思う体験は一度も無かったのですか？」

いや、そんな事は無い。

以前、僕がああ細く脆く優しい心を粉々に叩き壊してしまった女性、あのひとと出会った頃は、そしてお互いに相手の事を知りたくて、恐る恐るあの人の心の扉を開いた時には、とてもドキドキして、でも、自分の心の中の世界にいる時よりも、何倍も楽しかったし、癒された。

同じ時間を、同じ感覚を共有できる人がいたから。

でも、僕はその人を傷つけ、痛めつけてしまった。

例えばそれが意図的でなくても、結果として僕がやってしまった事には変わりが無い。

僕が元々異質でお互いに理解出来ないから、不用意に僕の心に近づいた人は、意図せぬ形で傷ついてしまうのだ。

それならばいっそ、僕の心に近づく人なんていない方が、その分だけ傷つく人が少なくなる。

それに、あの時は分かり合えたと思ったあの人に対してだって、やはりどこかで拭い去れぬ違和感を覚えていた。

ただ、僕の事を理解しようと歩み寄ってくれるのが分かるから、こちらからも歩み寄った時に受ける苦痛が緩和されただけ。

他の人を相手にするよりは、大分楽だったから、その時は癒されただけだ。

だから、本来なら僕のような人間とは出来るだけ付き合わない方がいいに決まっている。

「あなたはそういう心が満たされる経験も積んでいるというのに、根拠の無い思い込みでせっかくの悪い体験を無にしているのではありませんか？ あなたはそうやって、何も確認せずに自分ばかりを責めています、それではその女性はあなたの事を咎め立てたのですか？」

いや、何か咎め立てをされた記憶はない。

それ以前に、あの人の心が明らかに音を立てて崩れ始めた時、既に僕には殆ど連絡を取る事も叶わなかった。

でも、そこへ到る経緯を見れば、結果として僕の不用意な行動があの人を傷つけた事に変わりは無い。

僕の目の前に座る天使の様な女性は、更に憂いのこもった眼で僕を見た。

「あなたは本当に可哀想な方。良いものを良かったと素直に認めないで、何でも悪い方ばかりに捉えてしまっただけ、きっとどの様な世界でも、あなたにとっては悪い事ばかりの暗黒の世界に見えてしまうでしょう。その様な状態のままで、今この世界を旅立ってしまうのはとても悲しい事です、お勧めは出来ません」

「それでは一体、僕にどうしろというのですか？ 僕にはもう『現実と呼ばれる世界』に留まる気力も、意志も、理由もありません。僕はただ、自分を拘束して苦痛ばかりを与える下らない世界から脱出して、自由になりたいんです」

本当は、自由になりたいなんて嘘だ。

どうしたらよいか分からなくて、ただ何もしたくないだけだ。

僕はきっと、目の前の彼女を縋る様な眼で見ていたに違いない。

見た目は明らかに僕よりも年下なのに、まるで母親の様な雰囲気、光の衣をまとった真夜中の天使。

この人ならば、僕がどうすればいいのか、明確な回答を与えてくれるに違いない。

きっと、僕がなるほどと納得する理由を添えて。

*

「あなたには、今自分が何をすべきか、その為には何が必要か、どうすればいいのか、全て分かっている筈です。ただ、それを成し遂げる為に、きっかけとなるほんの一步を踏み出す為の、小さな勇気が欠けているのです」

傍らの僕を見下ろす天使の様な女性は、物腰柔らかく、丁寧に、しかしはっきりと僕に

む 向かって 言い放った。

全て分かっているといっても、何をどうすればいいのかなんてまるで分からないから、それならいっその世界を離れても良いと思っていた矢先なのだ。

自分がわからないものを、他人から『あなたには全て分かっています』といわれたって、何をどう判断してよいのかまるで分からない。

自分自身が分からないと言っているのだから。

「あなたには全て分かっている筈です。これまであなたがどの様にきて来たのかを、もう一度思い出してみるのです。辛い目に合った時をどの様にやり過ごしてきたか。悲しい目にあった時をどの様に乗り越えてきたか。そして、楽しかった時があなたにどれほどの癒しと潤いを与えてくれたか。それをもう一度、思い返して見て下さい」

彼女の言っている言葉は、相変わらず訳がわからなかったが、それでも子供の様に駄々を捏ねて不平不満を言い立てるだけの僕に対して、最大限の優しさと慈しみと情愛をもって、丹念に一つ一つ納得させてくれようという気持ちは感じられた。

ただ、直接的表現での回答を敢えて避けるのは、僕が自分自身で回答に辿り着く事が何より納得出来る理由となる……という事のようにだった。

さすがにこのままでは、幾ら我慢強そうに見える天使さまでも、いい加減見捨てられてしまうのではと、密かに恐怖を感じた僕は、ようやく彼女の言う『僕がこれまでどの様にしてきたのか』を思い巡らせる事にした。

幾ら口では『こちらの世界から早く自由になりたい』と見たとこで、本心からそう考えている訳では必ずしも無いのだ。

それに、彼女が現在の状態を抜け出すヒントを与えてくれるのなら、それに全てを賭けたい。

僕は、それこそ生まれてから、少なくとも記憶で遡れる最も昔から現在にまで至る、人生で重要なポイントとなる時期をもう一度振り返って、その時自分はどのような判断をしたのか、その結果がどうなったのかを詳細に検証する事にした。

子供の頃……これは殆ど断片的にしか覚えていない。

多分、敢えて取り上げるべき重大なトピックも無いだろう。

学生時代……この頃、物語を綴る事に興味を覚え、自分の中の世界を最初に構築した時期だと思う。

何しろ、物語を綴り始める以前は、逆に文字や文章を書く事を苦痛に感じていたのだから、気の持ち方如何で物事に対する印象は随分と変わるものだ。

また、この時期は自分の中の異物感を始めて意識した頃でもあった。

そもそもその発端は、自分の周辺にいた人物からの指摘で、その時は意味が良く分からずに軽く捉えていたのだが、やがて自分の異物感と疎外感を急速に成長させていく事になる。

社会人時代……この頃、急速に『現実と呼ばれる世界』の様々な仕組みに否応無く組み込まれ、束縛され、この世界における自分の異物感と疎外感を明確に意識した時期だった。

この世界での存在を維持する為に貴重な時間を提供し、周囲との関係を維持する為に自分を押し殺して神経をすり減らし、そうして得た僅かばかりの報酬で得たものより、失ったものの方が遥かに大きいと気付いた時期でもあった。

この頃、自分の中の世界に浸る精神的余裕も無く、自分の中の世界自体が荒廃し切っていた。

そんな自分の中の荒廃を、僅かばかりの報酬で得た、見てくれだけの下らない物とか、負担となっているものをつかの間忘れさせてくれるだけのまやかしの様な時間で誤魔化し、少しずつではあったが確実に僕自身が破綻に向かっていった。

僕にとっては僅かばかりの報酬よりも、自分の自由になる時間の方が重要だったし、自分を押し殺して神経をすり減らす事は、自分の中の世界の荒廃に直結した。

『現実と呼ばれる世界』はますます僕を押し潰し、僕が『そこから逃れたい』と悲鳴を上げ始めた頃、まるでもう少し僕をその場に押し止める様なタイミングで、あの人が現れた。

確かにあの人は僕を癒してくれたし、僕を理解しようと始めて踏み込んで来てくれた。

でも、結局僕はあの人の中のパンドラの箱を開けてしまい、大きな後悔に囚われてしまった。

それから、あの人が僕の前に現れても、ほんの少し『こちら側の世界』から逃れるタイミングが遅れただけで、早かれ遅かれそうになっていた事は、少なくとも僕自身の中では明らかだった。

あの人が去っていった後、耐え切れなくなった僕は、一旦『自分の中の世界』に舞い戻り、これまでに抱えてきたものを全て吐き出してリセットした。

一旦すべてを白紙に戻した上で、一旦ボロボロに崩壊した『自分の中の世界』を最初から作り直し、その上で、『自分の中の世界』と『現実と呼ばれる世界』の共存を図ろうと試行錯誤した。

しかし、『現実と呼ばれる世界』に接触を持つと、否応無くそちら側に引っ張り込まれ、『自分の中の世界』がどうしても疎かになってしまう。

どうしてもバランスが取れないまま、最終的にはとうとう『現実と呼ばれる世界』との接触を絶つ事を選択してしまったのだ。

しかし、自分の中の肉の体を保つ為には『現実と呼ばれる世界』とは関わらざるを得ないのが現代社会で、自分の心の維持には『自分の中の世界』の存在が不可欠だった。

そうか！

僕の中に密かなひらめきがあった。

自分自身が『現実と呼ばれる世界』に留まる為には、『自分の中の世界』との共存が不可欠なのだから、両者のバランスを取る方法を模索すればよい。

ここまではこれまでも試行錯誤してきた。

この中で、これまではしばしば『現実と呼ばれる世界』に引っ張られがちだったが、そうならないための、もしくは多少引っ張られても耐えられる安全装置を作ればよい。

安全装置といえは……やはり、僕自身に対して理解を示してくれる、そして癒してくれる『気心の知れたパートナー』なのだろう。

かつて崩壊寸前となった僕の心を支えてくれた、あの人の様な存在だ。

もちろん、それが一方的ではなく、相互補完的である事が望ましい。

でも、そんなパートナーは、そう簡単に見つかる筈が無い。

だったら、どうするか？

もう一つは、『現実と呼ばれる世界』と『自分の中の世界』を一つに束ねてしまう……つまり、物語を綴る事を職業としてしまえば、両者のバランスを取るなどと難しい事はせずに、フルタイムで『自分の中の世界』に没頭できる。

問題は、そう簡単にそんな職業には就けないという敷居の高さである。

自分の表現する世界観がある程度の支持を得ない限り、そもそも職業としては成り立たないのだし、その職業に辿り着くまでのきっかけを掴むのも難しい。

結局、どちらの選択肢もそれぞれに難しい条件を抱えているのだが、現時点の僕にはここまでしか分からなかった。

「わからない事はありません。ここまでのあなたの考えの中に、既に答えが述べられているではありませんか」

答えがある？

彼女はそう言うが……これを二つの選択肢とするのでは無しに、一旦『現実と呼ばれる世界』と『自分の中の世界』のバランス維持を目指した上で、安全装置を確保する。

その為には『現実と呼ばれる世界』に戻らなくては、安全装置を探す訳にもいかないのだから、いずれにしても僕の方から先に出るしかない。

それと同時に、二段構えで物語を綴る方向性も模索して、いずれはそちらの方向に脱皮できればよいのだが……。

後は、一旦『現実と呼ばれる世界』へ再び飛び出すほんの少しの勇気と、出来るだけ早く安全装置を確保するだけの運……か。

そこまで何とか漕ぎ着ければ、二段目の物語を綴る方はじっくりと長期戦で構えてもいい。

問題は、僕を維持する為の安全装置がいつ見つかるか、もしくは見つからないか、そこに掛かっている。

ここで再び『現実と呼ばれる世界』に戻ったとして、『自分の中の世界』とのバランスが崩れるのが早いか、その前に安全装置の確保が出来るかの勝負だ。

勝算は……わからない。

これまでの人生では、自分に歩み寄ってくれる人が一人しか見つからなかった。
 だから、当分現れないとも言えるし、すぐに出会えるかも知れない。
 少なくとも、『現実と呼ばれる世界』にそんな人が一人は確実にいた訳だから、もう一人くらいいる可能性はあるだろう。
 せめて、この部分だけでも先の見通しが立てば、思い切って一歩を踏み出す事が出来るのだが……。

「良くそこまで考えをまとめましたね。既に、あなたのやるべき事ははっきりしているのです。そして、物事を自分の思い通りに成し遂げるには、強い思いと、弛みない努力と、必要なのはこれだけです。あなたは既にそれだけの経験を積み、自分の経験の中から次の一歩を踏み出す方向性を導き出しているのですから、後は第一歩を踏み出す事。そして、運は自分の行動と意志で招きよせるのです」

ここまで来て、僕がこの回答に行き着くまでずっと見守ってくれていた、傍らの天使の様な女性は、初めて僕に温かな微笑を投げかけてくれた。

こんな僕にもまだ救いはあるのかもしれない。

でも、僕は一旦全てを諦めてしまい、『現実と呼ばれる世界』から旅立つ以外の道を全て閉ざしてしまった。

今更後戻りしようとしたって、どうやったら後戻りできるのかなんてまるで分からない。これまで散々傷ついて、これ以上傷つくのが嫌で『現実と呼ばれる世界』に向き合う事を避けてきたのだから、これから自分で第一歩を踏み出すなんて、とてもじゃないけど僕には出来ない。

僕はあそこに戻るのが怖くて仕方が無いんだ。

「あなたは『僕のやるべき事がはっきりしていて、それに必要な経験も僕が既に積んでいる』といいますが、その経験が僕に『もうあそこへは戻りたくない』と思わせるのです。幾らやるべき事が分かっているても、それがまた叶わなくて、今よりも更に深く傷つく事にはもう耐えられません。せめて、僅かな未来の見通しくらい立たなければ、自分から歩き出すなんてとても出来ません」

*

僕を覗き込む天使の様な女性は、一瞬表情を曇らせたような気がしたが、それでも僕に最大限の優しさと温かさと労わりの眼差しを向けてくれた。

「あなたにも、この人生でたった一度だけ、心の底からの願いを叶えてあげるチャンスが与えられています。今ここで、あなたが第一歩を踏み出せるように、その背中を押してあげる事に、たった一度のチャンスを使いますか？」

僕の心に迷いは無かった。

どうせこのまま、『現実と呼ばれる世界』から永久に旅立とうとしていたのだから、その様なチャンスが与えられるなら今使うべきだ。

そう思った。

「一度このチャンスを使ってしまったら、あなたの人生で二度目は無いのですよ。それでもよいですか？」

「はい。これまでその様なチャンスがある事自体知らなかったし、そのチャンスを使うなら今しかありません。お願いします」

もう一度念を押す彼女に、僕は一切の迷い無く即答した。

暫し間があって、彼女がゆっくりと話し始めた。

「分かりました。それでは、大きく深呼吸して、眼を閉じてから気持ちを楽にしてください。あなたの望みを叶えましょう」

僕は彼女の言葉に従って大きく深呼吸し、寝床に横たわったまま眼を閉じた。

しばらくそのままのままでいたが何の変化も無く、不信に思った僕が一旦眼を開こうとしたその時、閉じている筈の眼の中で微かな光が走った。

いや、眼の中に直接何かが映っている訳ではない。

まるで夢を見る様な感覚で、頭の中に直接何かの映像が映し出されている。

ここはどこだろうか。

どこか田舎の、見晴らしのよい丘の上の様な所に、それほど大きくは無いが、味のある作りの頑丈なログハウス調の小屋が見える。

秋の穏やかな日差しが窓越しにリビングを明るく照らし、ソファではゆったりと腰を降ろした夫婦らしき二人が、他愛も無い会話を交わしながら寛いでいる。

夫らしき男の膝には猫が丸まっており、小屋の脇にある大小屋にも大型犬が寝ている。

ふと、頭の中に、この映像の夫らしき男が十～十五年後の僕だという直感があった。

という事は、一緒に映っている女性は僕の妻となる人なのだろうか？

そこで映像が切り替わった。

ここは、居酒屋みたいな場所だ。

多分、二十人くらいでテーブルを囲んでの飲み会の最中のようなのだ。

僕は、斜向かいの席で周りの人の面倒を甲斐甲斐しく見ている、笑顔の似合う女性を見ていた。

ふと気がつくと、その人がいつの間にか僕の元に来て、何か話をしている。

また映像が切り替わって、今度は夜の公園にいた。

一緒にいるのは、居酒屋で僕と話していた女性だ。

何か話しているらしいが、声は聞こえない。

でも、何となく親密な雰囲気だ。

ここまでの映像を見て、これが僕の未来の一シーンである事が何となく感じ取れた。

そして、多分公園で一緒にいた女性は、あのログハウスで未来の僕と共にいた女性に間違いない。

その映像の中にいる僕が、彼女をどう感じているのかが、何となく伝わってくるような気がする。

きっと、この女性こそ僕が長年探し続けてきた『気心の知れたパートナー』なのだ。

ルックスはまあ普通で、眼が印象的なちょい可愛い系。

でも、この子の魅力はなんと言ってもハート……メンタル面にあると感じているらしい。

僕も彼女の中に何物にも代えがたい素晴らしい魅力を感じていて、彼女も僕の中に同様のものを感じているらしい事が分かる。

ああ、僕は、長年探し続けてきた『気心の知れたパートナー』にやっと巡り会えるのだ。

きっと自分の未来であろう、微笑ましい二人の姿に、僕は思わず眼が潤ってしまった。

まだ出会った訳ではないが、この先に出会う事が約束されている彼女の姿を、まさかこのような形でこの目にする事が出来るとは思わなかった。

ここからたった一歩を踏み出す勇気をもてば、僕は『気心の知れたパートナー』の彼女と出会う事が出来る。

彼女と出会えれば、この先どの様な困難が待ち受けていても、二人で乗り越える事が出来るような気がする。

僕が彼女を守り、そして彼女が僕を癒してくれる。

ああ、こんなタイミングですっと探し続けていた人に出会えるなんて、運命はなんて意地悪なんだろう。

でも、僕は何とか行き先を見間違える事無く彼女と出会って、それから彼女と共に定められた宿命を全うする事が出来そうだ。

「あの」

僕が礼を言おうと顔を開いた時、あの天使のような女性の姿は既に無かった。

でも、彼女は僕に未来への希望を見せてくれた。

この先いつどうやって彼女と出会うのかは分からないが、ここから『現実と呼ばれる世界』に再び舞い戻れば、今度こそ僕が探し続けていた人に出会える。

——一刻も早く彼女と出会って、少しでも長く彼女と一緒にいたい。

僕の心はその思いで一杯になっていた。

例え『現実と呼ばれる世界』が幾ら僕にとって過酷な世界であっても、彼女と二人なら潜り抜けていける。

そして、あの天使のような女性はちゃんと約束を守って、僕の背中を押してくれた。

僕はもう後戻りはしない。

ここに留まりもしない。

僕が進むべき道を歩む為に、今、その第一歩を踏み出すのだ。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記Blogでもお受けしております。